

## 第 95 回岩手医科大学歯学会総会抄録

日時：令和 5 年 12 月 2 日（土）午後 1 時より

会場：岩手医科大学歯学部 講堂（A 棟 4 階）

### 特別講演

生体に調和したクラウンの咬合面形態を求めて

Occlusal surface of the crown in harmony with the organism

○田邊 憲昌

岩手医科大学歯学部 補綴・インプラント学講座補綴・インプラント学分野

近年の歯科臨床におけるデジタル技術の進歩はめざましく、ジルコニアによる歯冠補綴やコンポジットレジンブロックによる CAD/CAM 冠の保険取載など新しい治療法が普及してきている。中でも CAD/CAM 装置によるクラウンの製作は現在、最も臨床において広く普及しているデジタル技術の 1 つであり、実際に岩手医科大学においても歯科医療センターでの製作数は年々増加し続けており、今後も発展していくことが期待される。

現在の社会状況から、金属価格の上昇や歯科技工士の不足などの問題があり、CAD/CAM による補綴装置の製作はこれらの問題を解決する方法の 1 つと考えられる。デジタル技術による補綴装置製作の利点としては、製作に関わる作業工程の短縮や人的・物的資源の削減といったメリットなどが挙げられる。しかしながら、デジタル技術が進歩しても、これまでに培われてきた鋳造法を中心とした補綴歯科治療よりも補綴装置の精度という意味では、まだまだ不十分な面が多く、今後の検討の余地が残されている。

我々の研究グループでも口腔内スキャナーやデジタル咬合器などを用いたクラウン製作について、どうすれば臨床において有効な臨床成績が得られるのかを念頭に置いて製作の方法や手技についての検討を行ってきた。特にクラウン

咬合面形態は、咀嚼・咬合機能に関わり、調整にも時間を要する部分であり、重要なポイントの一つである。

本講演では下顎運動データを反映した咬合面形態を付与した CAD/CAM 冠の製作方法ならびに口腔内スキャナーによる咬合採得に咬合力がどのように影響するのかについて研究データをもとに報告する。

### 優秀論文受賞講演

1. 化学療法中の唾液及び末梢血中白血球量の変動と口腔粘膜炎症の関連－臨床的縦断研究－

Association of oral mucositis occurrence with changes of leucocyte levels in saliva and peripheral blood during chemotherapy: a clinical longitudinal study

○杉山 由紀子

岩手医科大学歯学部口腔医学講座予防歯科学分野

口腔粘膜炎は化学療法を受ける患者に最も多く見られる有害事象である。唾液白血球が口腔粘膜の健康の維持に寄与していることは知られているが、化学療法中の患者に発生する口腔粘膜炎との関連は不明である。そこで本研究では唾液白血球量を測定し、末梢血中白血球量とともにそれらの動態と口腔粘膜炎の発生との関連を明らかにすることを目的とした。岩手医科大学附属病院で化学療法を受けている患者 31 名を対象とし、化学療法開始前に口腔内検査と唾液白血球量の測定を実施した。化学療法開始後は約 2 日ごとに唾液白血球量の測定、口腔粘膜の評価、口腔の疼痛程度の評価、口腔湿潤度の測定を行い、末梢血白血球数を診療記録から採

取した。さらに化学療法開始前、末梢白血球数が最低となった時点及びその後末梢白血球数が最も高値を呈した時点での関連を検討した。その結果、観察期間中に41.9%の被験者に口腔粘膜炎が発生した。口腔粘膜炎が発生した者では、しなかった者に比べてベースラインの50%以上に回復するまでの日数(50%回復日数)が有意に多かった。これらより、唾液中白血球量の測定は化学療法中の患者における晩期の口腔粘膜炎発症予測に有用であることが示された。

その後の研究では、口腔粘膜炎発症の微生物学的要因と考えられる口腔カンジダの抗がん剤投与前後の量的測定が口腔粘膜炎の発症予測に有用かを検討した。化学療法開始前に歯科へ周術期口腔管理を依頼された125名を対象とし、抗がん剤投与前と投与後の口腔粘膜の状態と口腔カンジダ量を測定した。カンジダ量は抗がん剤投与後に有意に増加し、抗がん剤投与前の段階と口腔粘膜スコアで有意な関連が認められたが、抗がん剤投与後と口腔粘膜スコアはさらに有意に強い関連を認めた。論文で報告した唾液白血球の回復は、化学療法後半で重度口腔粘膜炎の発症を予測したが、カンジダ量は比較的早期の粘膜炎発症を予測しうることが示唆された。

## 2. 下顎骨病的骨折を呈する10例の患者の臨床報告

Clinical study of pathological mandibular fractures in our department

○小松 祐子, 川井 忠, 大橋 祐生,  
古城 慎太郎, 山谷 元気, 角田 直子,  
宮本 郁也, 山田 浩之

岩手医科大学歯学部口腔顎顔面再建学講座  
口腔外科学分野

**【目的】** 下顎骨病的骨折を有する患者の臨床情報を把握することを目的にした。

**【対象および方法】** 本研究は症例集積研究である。2015年1月から2019年12月までの5年間に当科を受診し、下顎骨骨折と診断された症例を診療録と画像検査所見から抽出した。これ

らの症例のうち、病的骨折と臨床的に診断されたのを対象とした。さらに、病的骨折の症例について、初診時の原疾患、発症時期、骨折時の年齢、性別、骨折部位、発症誘因、治療法および治療成績を調査した。

**【結果】** 5年間で下顎骨病的骨折と診断された症例は10例であった。原疾患は悪性腫瘍が5例、放射線性骨髄炎および顎骨壊死が2例、嚢胞が2例、良性腫瘍が1例であった。悪性腫瘍の5例は初診時から病的骨折を認めていたのが1例、外科療法中と外科療法後に病的骨折を認めたのが各々2例であった。放射線性骨髄炎の2例は40 Gy以上の放射線照射が行われていた。嚢胞の2例は埋伏智歯を伴う含菌性嚢胞であり、外科療法中に骨折を認めた。良性腫瘍の症例は初回手術後の顎骨欠損が大きく、二期再建の待機中であった。上記10例のうち外科療法が選択されたのは2例、保存療法が選択されたのは5例であり、他3例は病的骨折に対する治療が不要であった。治療対象の7例において、治療方法によらず発症後1年以内に「軽快」と評価されたのは4例、「不変」と評価されたものが2例、転院となったため「評価困難」であったものが1例であった。

**【考察】** 本研究は少数例の症例集積研究ではあるが、咬合偏位を認めた症例において保存療法が奏功しなかった。したがって、今後同様な症例に対しては外科療法の選択に関して慎重に検討する必要があると考えられた。

## 3. 岩手医科大学附属歯科医療センター義歯外来における3ユニットブリッジの予後に関する10年間の後ろ向きコホート研究

10-year retrospective study of 3-unit fixed dental prosthesis in denture outpatient department, Iwate Medical University Dental Center

○齊藤 裕美子

岩手医科大学歯学部補綴・インプラント学講座 補綴・インプラント学分野

**目的:** 岩手医科大学附属歯科医療センター義歯外来における過去の3ユニットブリッジを対象